

[A年] 降誕前第9主日(2020年10月25日)

【旧約聖書日課】 箴言 8章1節、22～31節

1 知恵が呼びかけ

英知が声をあげているではないか。

22 主は、その道の初めにわたしを造られた。

いにしへの御業になお、先立って。

23 永遠の昔、わたしは祝別されていた。

太初、大地に先立って。

24 わたしは生み出されていた

深淵も水のみなきる源も、まだ存在しないとき。

25 山々の基も据えられてはおらず、

丘もなかったが

わたしは生み出されていた。

26 大地も野も、地上の最初の塵も

まだ造られていなかった。

27 わたしはそこにいた

主が天をその位置に備え

深淵の面に輪を描いて境界とされたとき

28 主が上から雲に力をもたせ

深淵の源に勢いを与えられたとき

29 この原始の海に境界を定め

水が岸を越えないようにし

大地の基を定められたとき。

30 御もとにあって、わたしは巧みな者となり

日々、主を楽しませる者となって

絶えず主の御前で樂を奏し

31 主の造られたこの地上の人々と共に樂を奏し

人の子らと共に楽しむ。

【使徒書日課】

ヨハネの黙示録 21章1～4節、22～27節

1 わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。

最初の天と最初の地は去って行き、もはや海も

なくなった。²更にわたしは、聖なる都、新しい

エルサレムが、夫のために着飾った花嫁のよう

に用意を整えて、神のもとを離れ、天から下っ

て来るのを見た。³そのとき、わたしは玉座から

語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にある、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、⁴彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもは過ぎ去ったからである。」

²²わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。²³この都には、それを照らす太陽も月も、必要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。²⁴諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。²⁵都の門は、一日中決して閉ざされない。そこには夜がないからである。²⁶人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。²⁷しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者はだれ一人、決して都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れる。

【福音書日課】

マタイによる福音書 10章28～33節

²⁸体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。²⁹二羽の雀が一アサリオンで売られているのではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。³⁰あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。³¹だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

³²「だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言ひ表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言ひ表す。³³しかし、人々の前でわたしを知らないと言ひ表す者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言ひ表す。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

箴言 8章1節、22～31節

- 1 知恵は呼びかけていないか。
英知は声をあげていないか。
- 22 主はその道の初めに私を造った。
いにしえの御業の始まりとして。
- 23 とこしえより、私は立てられていた
太初、地の始まりから。
- 24 まだ深淵もないとき
私は生み出されていた
大いなる原初の水の源もまだないとき。
- 25 山々もまだ据えられず、丘もないとき
私は生み出されていた。
- 26 神が、まだ地も野も
この世界の塵の先駆けさえも
造っていなかったとき
- 27 神が天を確かなものとしたとき
私はそこにいた。
神が深淵の上に蒼穹を定めたとき
- 28 神が上にある雲を固めたとき
深淵の源に勢いを与えたとき
- 29 この原初の海に境界を定め
水が岸を越えないようにして
地の基を定めたときに。
- 30 私は神の傍らで腕を振るう者となり
日々、神を喜ばせ〔直訳→喜びとなり〕
いつの時も御前に楽しむ者となった。
- 31 神の造られたこの地、この世界で楽しみ
人の子らを喜ばせた
〔直訳→私の喜びは人の子らと共に〕。

ヨハネの黙示録 21章1～4節、22～27節

- 1 また私は、新しい天と新しい地を見た。最初の
の天と最初の地は過ぎ去り、もはや海もない。
- 2 また私は、聖なる都、新しいエルサレムが、夫
のために装った花嫁のように支度を整え、神の

もとを出て、天から降って来るのを見た。³そして、私は玉座から語りかける大きな声を聞いた。
「見よ、神の幕屋が人と共にいて、神が人と共に住み、人は神の民となる。神自ら人と共にいて、その神となり、⁴目から涙をことごとく拭い去ってくださる。もはや死もなく、悲しみも嘆きも痛みもない。最初のものが過ぎ去ったからである。」

²²私は、この都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが神殿だからである。
²³この都には、それを照らす太陽も月も、必要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。²⁴諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて都に来る。²⁵都の門は、終日閉じることがない。そこには夜がないからである。²⁶人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。²⁷しかし、汚れた者、忌まわしいことうあ偽りを行う者は誰一人、都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入ることができる。

マタイによる福音書 10章28～33節

²⁸体は殺しても、命は殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、命も体もゲヘナ〔別訳→地獄〕で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。²⁹二羽の雀は一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。³⁰あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。³¹だから、恐れることはない。あなたがたは、たくさんの雀よりも優れた者である。」

³²「だから、誰でも人々の前で私を認める者は、私も天の父の前で、その人を認める。³³しかし、人々の前で私を拒む者は、私も天の父の前で、その人を拒む。」

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・10月25日「降誕前第9主日」の日課主題は「創造」。日本基督教団「新しい教会暦」に則った「主日聖書日課表」は、この日から新しい一巡りが始まる。今年新しく始まる一巡りは「A年」と呼ばれる4年サイクルの一年目で、福音書日課が「マタイによる福音書」を基本にして構成された年間聖書日課表となっている。各年最初の主日である「降誕前第9主日」は、「降誕日」(12月25日)から遡って9主日前に設定されているが、この9週という期間は、伝統的な「待降節(アドヴェント)」の4主日の前に5主日を加えた「降誕前」節として期節設定されている。この期間設定は、古い時代に「待降節」を9週間設定する教会暦を用いた地域があったことを参考に、キリスト降誕以前の「旧約」の物語を集中的に取り上げることが目的として設定された。このような「新しい教会暦」は、1960年代に英国で超教派の「ジョイント・リタージカル・グループ(JLC)」が考案したもので、日本基督教団でも採用してきたが、その後「第2ヴァチカン公会議」を開いたローマ・カトリックの大方針転換でプロテスタント諸教派との共同歩調が一気に進み、現在の主流は、より伝統的な教会暦と聖書日課表の習慣に基づいた「共通聖書日課(コモン・レクシヨナリー)」改訂版を共通に用いることとなっている。

・「降誕前第9主日」は、教会暦の一巡りの初めという位置づけから、「創造」を主題とした聖書日課が設定されている。「聖書」における「創造」論は、おもに「創世記」1~2章に基づいた議論として取り上げられることが多いが、実際には、「聖書」全体で多様な「創造」に関する叙述があり、「創世記」のみから端的に「聖書の創造論」を読み取ることは無理がある。古代オリエント世界には、一定の共通した源泉を持つ「創造神話」が広汎に伝播・伝承されていたと考えられるが、「聖書」における「創造」についての叙述は、単にいずれかの「創造神話」を採録したということではなく、既知の「創造神話」を素材とした「創造」神学を提示するためであったことは明らかであろう。一般に「神話」的素材は伝承される担い手によって異なる目的に沿って形式および内容が編集されることによって一定の伝承形態を保持するようになる。「聖書」の伝承素材のかなりの部分は、祭司・預言者を中心とした宗教的役割を担う社会集団を担い手として伝承され、「聖書」を構成するに至っていると考えられるが、その伝承形態は「典礼」的なものであり、「典礼」に用いられる朗誦形式と神学的内容が特徴になっていると考えられる。これらのことを踏まえて、「聖書」の「創造」に関する叙述の中に見られる形式と内容の特徴に着目することが不可欠である一方、神話的表現によって提示される世界観の事実性を問題にすることは不毛な議論を招くことになりかねず注意が必要である。

旧約日課(箴言8章より)

・「箴言」についての概要は、資料「聖書と祈りの会200805」や資料「同200930」を参照。「箴言」は、格言集として編集されているが、一般的な格言集であるというよりは、すべての格言の根源として「神」を位置づける「神学的格言論」に基づく格言集である。その際に重要な表現として繰り返し用いられるのが擬人化された「知恵」であり、神を源泉とする「知恵」が神のもとから遣わされることによって人の「知恵」となるという構図に基づいて、その「知恵」を人が得る前提としての神に対する畏怖を保つべきことを教えとしている。

・日課箇所では、神から遣わされる「知恵」が、神の御業の初めとしての「創造」に先立って生み出されたものであると語られる。この「知恵」は、すべての神の御業としての「創造」を基礎づける秩序原理として位置づけられている。「先在の知恵」とも言いうる思想である。このような思想は、現代の福音派(根本主義)神学から生まれた「創造科学」において「インテリジェント・デザイン」説として主張されるような思想を根拠づけるものとなっているが、それらの主張は「事実」を問題にしているというよりは「世界認識」を問題にしており、「科学的」というよりは「哲学的」なものである。一方で、「先在の知恵」の思想は、明白に「新約」の神学思想に影響を与えており、特に「ヨハネによる福音書」が冒頭で提示する「神の言葉の受肉」論は、「先在のキリスト」という視点を提示することで、「父と子」の一体性を福音書全体の基調とすることを目指している。もっとも、「ヨハネ福音書」は必ずしも時間軸上で理解されるような「創造」から始まり「終末」に至る「救済史」を思考の枠にしておらず、むしろ、無時間的で空間的な「光と闇」あるいは「神(の領域)と世(の領域)」という枠組みで「救済」を描いており、冒頭の「初めに」も、時間的な意味合いは強くないと考えられる。

使徒書日課(黙示録21章より)

・「ヨハネの黙示録」は、「新約」の最後に置かれた「黙示文学」の様式で描かれた文書で、「ヨハネ」が自分の関わる「アジアの七つの教会」に宛てて書簡形式で自らの幻視した「啓示」を書き送るという形式でまとめられている。「黙示録」の呼称は、1:1に現れる「黙示(アポカリュプシス)」に基づいているが、この語は一般には「啓示」あるいは「現れ/実現」と訳され、特にパウロ書簡に頻出する(ルカ2:32、ロマ2:5、同8:19、同16:25、Iコリ1:7、同14:6,26、IIコリ12:1,7、ガラ1:12、同2:2、エフェ1:17、同3:3、IIテサ1:7、Iペト1:7,13、同4:13)。

・日課箇所は、「黙示録」の最終盤にあたり、「終末」の究極的世界観が提示される。そこで示されるのは、「新しい天と新しい地」という表現による「天地創造」の更新である。救済史観によれば、「天地創造」は世界の初めに御業として行われたが、その「創造」の秩序を人が破壊したため、神が「再創造」によって「創造」

の秩序を回復して下さることで救済が完成する。しかし、このような筋書きは、最初の「天地創造」の御業が不完全であった、つまり「創造神」は不完全な神であったという異論を招いてきた(古代教会で排斥された「グノーシス派」は、そのような視点から「旧約」を否定していたとされる)。それに対して、「創造」の御業が歴史の初めから継続的に行われてきて、「終末」のときに完成する、という継続的「創造」論が示されてきた。

福音書日課(マタイ 10 章より)

・「マタイによる福音書」は、「新約」の最初に置かれた文書で、主イエスの「言葉と行い」を伝記物語の形式で描くことで「キリストによってもたらされた新しい神の救いの御業」を「福音」として示すものであるが、前提としてすでに信じて弟子たちの教会に加わった者たちの共同体に向けて語られる内容が主要なものとなっている。近代の歴史批判研究が始まるまでは、四福音書中で最初に著された福音書であると考えられていたが、歴史批判研究を踏まえた 19 世紀以降の通説では、「マルコによる福音書」が紀元 60 年代に著され広く教会間で共有されるようになった後の紀元 80 年代ごろに、異邦人とユダヤ人の混成教会共同体の実情に即して独自に継承していた伝承集などを素材に「マルコ福音書」を改変して編集されたものと考えられている。日課箇所は、ルカ福音書(12:2~7)に並行箇所があるが、細かい部分で異同がある。

・28 節「魂」は「プシュケー」の訳語で、人の内面性を表すが(「サイコ」の語源)、ギリシア語文化で人の内面と外面(「体=ソーマ」または「肉=サルクス」)を分離しうるものとして理解する傾向にあるのに対して、「旧約」文化ではそれらを分離不可能な一体のものとして考える傾向にある。そこで、「聖書」の文脈では、「魂」は「肉」と一体不可分のものとして「命」を意味すると訳される場合もある。

来週の誕生日 (10 月 25 日~30 日)

主日礼拝の讚美歌から

・21-15 番「みことばにより」。20 世紀のイギリスでは最も広く歌われた讚美歌の一つとされる。作詞の J. モンゴメリーは 18 世紀後半にイギリスでモラヴィア兄弟団の伝道者の家庭に生まれ育ち、19 世紀にかけて文筆家・新聞編集者として活躍しながら讚美歌の作詞活動をした人物。

・21-425 番「こすずめも、くじらも」は、1983 年、米国ミズーリ州のコンコーディア・ルーテル教会の設立 110 周年記念のために新しく作られ(作詞作曲は 82 番「今こそここに」と同じコンビ)、後に諸教派の讚美歌集に採用された。

・21-514 番「美しい天と地の造り主」(= I 449「あめつちの主なるおお御神」)は、20 世紀カナダで YWCA 活動に従事したメアリー・エドガーがキャンブソングとして作詞した歌詞。曲は、19 世紀英国教

会司祭ブリンジャーが趣味で作曲して残した曲の一つ。

21-15「みことばにより」

Songs of Praise the Angels Sang

1. Songs of praise the angels sang, / heaven with alleluia sang, / when creation was begun, / when God spake and it was done.
2. Songs of praise awoke the morn / when the Prince of peace was born; / songs of praise arose when he / captive led captivity.
3. Heaven and earth must pass away; / songs of praise shall crown that day: / God will make new heavens and earth; / songs of praise shall hail their birth.
4. And shall we alone be dumb / till that glorious kingdom come? / No, the church delights to raise / psalms and hymns and songs of praise.
5. Saints below, with heart and voice, / still in songs of praise rejoice; / learning here, by faith and love, / songs of praise to sing above.
6. Hymns of glory, songs of praise, / Father, unto thee we raise, / Jesu, glory unto thee, / with the Spirit, ever be.

21-425「こすずめも、くじらも」

God of the Sparrow

1. God of the sparrow / God of the whale / God of the swirling stars / How does the creature say Awe / How does the creature say Praise
2. God of the earthquake / God of the storm / God of the trumpet blast / How does the creature cry Woe / How does the creature cry Save
3. God of the rainbow / God of the cross / God of the empty grave / How does the creature say Grace / How does the creature say Thanks
4. God of the hungry / God of the sick / God of the prodigal / How does the creature say Care / How does the creature say Life
5. God of the neighbour / God of the foe / God of the pruning hook / How does the creature say Love / How does the creature say Peace
6. God of the ages / God near at hand / God of the loving heart / How do your children say Joy / How do your children say Home

21-514「美しい天と地の造り主」

God, who touchest earth with beauty

1. God who touchest earth with beauty, / Make my heart anew; / With thy Spirit recreate me / Pure and strong and true.
2. Like thy springs and running waters, / Make me crystal pure; / Like thy rocks of towering grandeur, / Make me strong and sure.
3. Like thy dancing waves in sunlight, / Make me glad and free; / Like the straightness of the pine trees / Let me upright be.
4. Like the arching of the heavens, / Lift my thoughts above; / Turn my dreams to noble action, / Ministries of love.
5. Like the birds that soar while singing, / Give my heart a song; / May the music of thanksgiving / Echo clear and strong.
6. God who touchest earth with beauty, / Make my heart anew; / Keep me ever by thy Spirit / Pure and strong and true.